

2017年4月2日

## 福音書からのメッセージ

すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

(ヨハネによる福音書 11章 44節)

幼稚園の子どもたちに、「神さまってどんな人だと思う？」って聞くことがあります。みんな、いろんなことを言います。「優しい」、「怒ったら怖い」、「いつも見ていてくれる」など様々です。でも不思議なことに、子どもたちは感覚的に、神さまはすぐそばにいてくれると思っているようです。

しかし大人になっていくにつれ、わたしたちと神さまとの距離は少しずつ離れていくように思います。神さまはちょっと離れたところにおいて、必要なときだけ来てくれるといい。逆に言うと、神さまがずっとそばにいたら困るのです。親子の関係だってそうです。小さい頃はいつも一緒にいてほしかった親が、だんだんうっとうしくなってしまう。でも離れているようで、いつもそばにいるのが親です。たとえ肉体的には離れていたとしても、その心はいつもそばにいる。神さまも同じです。わたしたちがどんなに離れていても、神さまは決して手を離そうとはされないのです。

神さまはその独り子であるイエス様をわたしたちの元に遣わされました。神さまから離れ、自分勝手に生きようとするわたしたちのもとに。イエス様はわたしたちの元に来られ、手を差し出し、抱きかかえ、歩いてくださいます。わたしたちと同じ位置まで下りてきて、同じ目線に立たれるのです。

今日の箇所、涙を流すイエス様の姿が描かれました。それは死の前に恐れ、立ちすくみ、涙する人々の姿を見たからでした。わたしたちも日常の中で、どうしようもな



い現実に涙を流してしまうことがあると思います。イエス様はそのようなわたしたちを見て、どうされるのでしょうか。「信仰の薄い者よ、泣くな」と叱られるのでしょうか。

そうではありません。イエス様はわたしたちの悲しみを負い、共に涙を流してくださいのお方です。わたしたちの心を知り、わたしたちと同じところに来て、一緒に泣いてくださるのです。

そして、涙を流しながらも、恐れるな、信じてほしいと、わたしたちに語り続けます。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」

大斎節も、残り二週間となりました。イエス様がわたしたち一人ひとりのために十字架につけられる、そのときを思い起こすときです。イエス様は涙を流しながら、わたしたちに、生きてほしいと望まれました。ただ滅びていく存在から永遠の命を得る存在へと変えてくださる、そのことを信じたいと思います。

そして復活日にわたしたちもまた、復活の命にあずかりたいと思います。

### 桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>